

峠三吉「墓標」と

一九五〇年夏の広島

黒川 伊織

1 なぜ「墓標」なのか

峠三吉「墓標」は、峠の作品のなかでも、「ちちをかえせ」はをかえせ」とうたう『原爆詩集』の序詩に次いでよく知られた作品であろう。「墓標」は、峠にとつてただ一冊の詩集となった『原爆詩集』（初版はガリ版刷り五〇〇部、新日本文学会広島支部われらの詩の会、一九五一年九月。増補版は青木文庫、一九五二年六月）に収録されたことでひろく知られ、読み継がれることになった。また、『原爆詩集』刊行の直前には、「八・一五六周年記念詩特集」中の一作品として『新日本文学』（一九五一年八月号）に掲載されており、『原爆詩集』刊行後に『日本ヒューマニズム詩集』第一集（三一書房、一九五二年）に採録された際には、読者による投票で第一回詩人賞を獲得するなど（一九五三年十一月）、発表当時からひろく読み手の共感を集めた作品であった。

活字になる前の「墓標」がはじめて公の場で朗読されたのは、『原爆詩集』が刊行される一年近く前の一九五〇年十月八日のことであった。同日に爆心地近くの五柳荘で開催された丸木位里・

赤松俊子作の「原爆の凶」展覧会の席上で、新日本文学会より来広した詩人壺井繁治が同席するなか、峠自身が「墓標」を朗読したのである。このように「墓標」は一九五〇年の秋にはすでに成立していたのであるが、この時期は朝鮮戦争勃発（六月二十五日）の直後であり、朝鮮人民軍の猛攻に対して米軍を中心とする国連軍が本格的な反攻を開始した時期でもあった（九月十五日、仁川上陸作戦）。

朝鮮戦争勃発直後のこの時期には、日本の各地でも、左派の朝鮮人・日本人を担い手として、米軍の朝鮮戦争への介入に反対する反戦運動が起こされた。しかしながら、このような反戦運動は、勅令第三一一号（「聯合國占領軍の占領目的に有害な行為に対する処罰等に関する勅令」）違反として厳しい取締の対象となり、それを担った多くの人々が逮捕投獄されることとなった。「墓標」といえば、被爆死した小学生に呼びかける冒頭の部分が有名であるが、しかし、いま述べたような時代状況と向き合うなかで書かれたこの作品は、朝鮮戦争勃発直後に占領下の広島で朝鮮戦争への反戦と被爆体験の捉え直しとを連動させながらなされた詩的表現として、特別に重要な意味を持っている。本稿が注目するのは、そのような作品としての「墓標」である。

ところで、「墓標」というのは、作品の中に繰り返し登場する「斉美小学校戦災児童の霊」と書かれた「一本のちいさな墓標」のことである。そしてこの作品に読み込まれている空間は、この「斉美小学校戦災児童の霊」という「墓標」が立つ場所から見渡される広島市の中心部―とりわけ原爆で灰燼に帰した西練兵場跡地の東端と繁華街の中心である八丁堀交差点が接するあたり―に

ほかならない。広島市中心部のこの空間は、被爆の記憶と占領下の政治的せめぎ合いが重層的に刻み込まれた空間であり、「墓標」はそのような空間を舞台とする作品としてあらためて読み直される必要がある。

そこで、本稿では、「墓標」の舞台となった広島市中心部の空間構成を明らかにしつつ、二十連・一四五行よりなるこの作品(資料①参照、『原爆詩集』所収のテキストによる。なお、テキストの変遷については本文中で後述する)を三つの部分にわけて分析していくこととしたい。

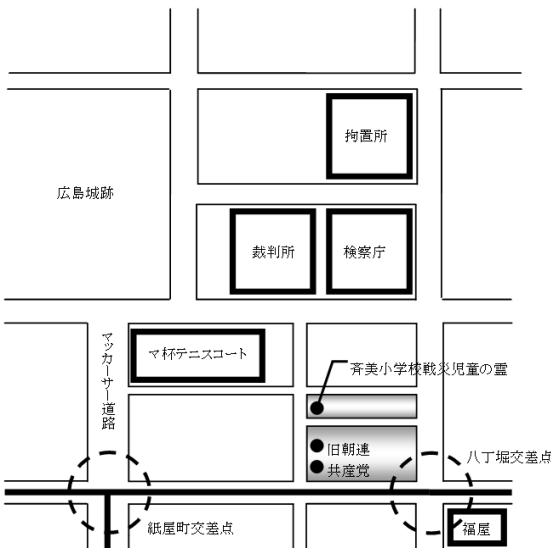
2 重なり合いせめぎ合う空間―占領下の被爆地広島の「墓標」―

戦前・戦中の広島は軍都であった。日清戦争の際に大本営が置かれた広島城には第五師団司令部が置かれ、この広島城を中心とする広大な軍用地(現在の地名でいうと、南北を相生通りと城北通りにはさまれ、東西を八丁堀西交差点から白島に北上する道と本川にはさまれた地域)は、歩兵第十一連隊、野砲兵第五連隊、陸軍病院、広島陸軍幼年学校といった軍関係の施設で占められていた。西練兵場は、この軍用地のうち広島城の南側から現在の相生通りにかけての地域を占め、その東向かいには、陸軍将校の親睦団体偕行社が、そしてその北隣には偕行社斉美小学校―「墓標」の主人公の子供たちが通っていた小学校―があった。

原爆の投下により、爆心地から半径一キロ以内にあったこのあたりは灰燼に帰した。敗戦後間もなくから、広島城跡以西の旧軍用地には市営住宅が建設されるとともに、本川沿いにはいわゆる

「原爆スラム」が形成されることになる。その後、一九四九年に施行された広島平和都市建設法は、広島市の「復興」をおしすすめ、街の姿を大きく変えていくことになるが(たとえば百メートル道路など、現在見られる広島市旧市街の街区はこのとき整備された)、一九五〇年夏の広島はそのような「復興」事業が本格化する時期にあたっていた。

図①は、戦前の軍用地のうち、広島城跡の東から東南の八丁堀交差点にかけての区域の一九五〇年夏の状況を示した概略図である(当時の八丁堀西交差点は、現在の八丁堀西交差点にあたる。現在の



注(1)図の上側が北を示す 注(2)細い道路については省略した

注(3)八丁堀交差点は現在八丁堀西交差点となっている

図① 一九五〇年夏の広島市中心部概略図

八丁堀交差点は、一九五二年三月に広電白島線が現在の路線に移設開通した際に整備されたものである。これを参照しつつ、広島城跡から八丁堀交差点にかけての空間構成を見ていこう。図①に明らかのように、広島城跡の東側には検察庁・裁判所・拘留所などの司法関係機関が集中しており、広島城跡の南側にあたる西練兵場跡地には、一九四九年八月五日に開催された第三回マッカーサー元帥杯全国競技大会（マ杯）のためにマッカーサーの名を冠した道路が通されるとともに、その一角にはマ杯テニスコートと呼ばれた中央庭球場が設置されていた。

そして、八丁堀交差点の北西、図①で網掛けにした区域が、旧偕行社の敷地である。このうち、道路をはさんだ北側、すなわち斉美小学校の跡地にはY M C Aが建っており、Y M C Aとの関係は不明なのだが、その一角に「斉美小学校戦災児童の霊」と記された「一本のちいさな墓標」が立っていた（建立時期は不明）。そしてその南側の八丁堀交差点に面する区画には、日本共産党中国地方委員会・広島県委員会・広島地区委員会が共有する事務所があり、そのすぐ近くには在日朝鮮人連盟（朝連）の広島支部があった。朝連は一九四九年九月に団体等規制令によって強制解散させられていたが、その後も左派在日朝鮮人組織の事務所はこのあたりに置かれていたようである（一九五〇年末に広島に来た李実根は、当時八丁堀に「民戦中国地方本部」があったと回想している、『プライド』、汐文社、二〇〇六年）。ここで日本共産党と左派の在日朝鮮人運動との関係について見ておくと、戦後再建された日本共産党の中央委員には在日朝鮮人党员も選出され、一九四九年は、はじめからは左派在日朝鮮人の日本共産党への集団入党がすすめられる

など、朝鮮戦争勃発前後には日本共産党と左派の在日朝鮮人運動との間にはきわめて密接な関係が存在していた。

このように、原爆で壊滅したこの地域には、被爆死した児童の墓標を追いやるようにして連合国最高司令官の名を冠した施設が作られるとともに、熾烈な対立関係にある司法機関と左派組織も微妙な距離を保ちつつ併存していた。図①として示した空間は、被爆の記憶と占領下の政治的せめぎ合いが重層的に刻み込まれた空間だったのである。峠が「墓標」の舞台としたのは、このような空間であった。

そのことを踏まえるなら、この作品が、「広島平和都市建設株式会社」（一九四九年制定の広島平和都市建設法を皮肉った表現）や「マ杯テニスコート」により、「片隅におしこめられ／いまはもう／気づくひともない／一本のちいさな墓標」から説き起こされる必然性も、容易に了解されるだろう。この作品の第一の部分（第1〜10連）では、広島島の「復興」が皮肉を込めて描かれるとともに、そのかげで原爆の犠牲となった子供たちの「墓標」が忘れ去られ朽ち果てていくさまが対比的に描かれる。そしてそのうえで被爆時の子供たちの状況がたどり直されていくのである。

これまで「墓標」が読まれる際にもつぱら注目されてきたのはこの部分である。しかし、本稿では、この部分よりもむしろ、第二の部分（第11〜13連）・第三の部分（第14〜20連）に注目したい。なぜなら、本稿では、朝鮮戦争勃発直後に占領下の広島で朝鮮戦争への反戦と被爆体験の捉え直しとを連動させながらなされた詩的表現としての「墓標」に注目しているからである。以下では、被爆体験をこのように捉え直すことを促した朝鮮戦争勃発直後の

広島が、この作品のなかでいかに描かれているかを見ていきたい。繰り返しを恐れずに言えば、その際に鍵となるのは、占領下の広島での朝鮮戦争への反戦運動と、作品の舞台となったこの地域の特徴的な空間構成である。

3 朝鮮戦争勃発直後の広島―拘置所の方へつながれてゆく人たち―

第11〜13連では、朝鮮戦争勃発直後の被爆地広島における政治的せめぎ合いが、「かろうじてのこされた一本の標柱」の立つ場所から見渡されている。そしてここには、次に述べるように、朝鮮戦争勃発直後に左派の朝鮮人・日本人によって担われた反戦運動が、重要な主題として読み込まれている。

一九五〇年六月二十五日に朝鮮戦争が勃発したとき、米軍の朝鮮戦争への介入に反対する反戦運動を担ったのは、前年の九月に強制解散させられた朝連に結集していた左派の在日朝鮮人や、この年の六月に指導部が公職追放された日本共産党の党員らであった。

彼らによって担われた朝鮮戦争への反戦運動は、勅令第三一一号違反事件として厳しく取り締まられた。川島高峰『米軍占領下の反戦平和運動―朝鮮戦争勃発前後―』（現代史料出版、二〇〇〇年、以下『資料集』と略記する）には、日本の警察が勅令第三一一号違反事件についてGHQ参謀二部に提出した文書類とそれについての川島の解説がおさめられているので、ここではこの川島の解説によりながら、朝鮮戦争勃発前後における勅令第三一一号違反事件の検挙状況を確認しておこう。

五月三十日、共産党を支持するデモ隊と占領軍が皇居前広場で衝突し（五・三〇事件）、これを契機に反米的言動が勅令第三一一号違反として厳しく取り締まられるようになった。翌六月一日から七月二十一日までに、全国で三六三名が勅令第三一一号違反の容疑で検挙されている。検挙者の内訳は、「朝鮮人一三二名、共産党員九七名、労組員八四名、学生二五名、自由労働者二五名」であり、検挙者のほとんどが共産党員あるいはその同調者であったとされている。朝鮮戦争に反対するどのような言動や行動が勅令第三一一号違反として取り締まられることになったのかは、反戦運動が報道を通じて拡大することを危惧した当局による規制のため当時の報道からは窺いがたいが、『資料集』によると、「反占領的文書」と見なされたピラに記されたスローガンは、「朝鮮の内戦に外国は干渉するな！ 朝鮮に武器を送るな 造るな！」（六月二十九日、大阪）、「侵略者アメリカ帝国主義」（七月一日、長崎）、「北鮮軍は解放軍」（七月二日、島根）などであったという。つまり、朝鮮戦争勃発直後において朝鮮戦争への「反戦」を訴えることは、朝鮮戦争へのアメリカの介入とそれへの日本の協力に反対すること、すなわち「反米」にほかならなかつたのである。

広島での運動について見ると、『資料集』には、七月十一日付で刑事局捜査課が作成した「犯罪即報 勅令第三一一号違反検挙者について（広島）」という文書が収録されており、ここには検挙者の住所・氏名・年齢、逮捕日時・犯罪事実などが記されている。この文書によると、七月十一日までに広島県下では七十一名が検挙されており、その内訳は「朝鮮人三三名、共産党員二二名、一般人一三名」であった。九月未までの勅令第三一一号違反事件

による検挙者数は全国で七九九名であったが、東京・広島・福岡・大阪・山口の順に検挙者が多かったとされ（赤い事件 広島が全国で二位）、『中国新聞』、一九五〇年十月十五日）、広島は朝鮮戦争への反戦運動においてひとつの焦点となった地域であった。犯罪事実の項目を見ると、七月一日に広島県内の各地で「占領軍誹謗文書」を配布した事例が圧倒的多数を占めており、同日付で同時に行動を起こすことが事前に打ち合わされていたものと思われる。そして、この事件の報道機関による第一報は、次のような内容だった。

「既に二十四名を逮捕、朝鮮問題声明書配布事件」

広島県下の各警察では国警広島県本部ならびに広島地検の指令で在日朝鮮人団体広島県協議会の名で出された朝鮮問題に関する声明書の配布容疑者を内偵、続々検挙中であるが、三日広島東署で共産党広島地区委員森繁平（二十七）を検挙するまでに高田地区署で四名、安佐地区署で三名など二十四名を逮捕した。そのうち共産党員は十三名、朝鮮人十一名で、このほか庄原町署から逮捕状が請求された李章各こと眞城章各（十八）ほか十一名の逃走中の容疑者に対し三日それぞれ逮捕令状が発せられたので、四日までには三十名を超える見込みで逮捕された者の自供によりさらに容疑者はふえる見込みである。（『中国新聞』、一九五〇年七月三日）

七月一日に全県下で同時に起きた反戦運動が、「朝鮮問題声明書配布事件」と呼ばれたことがわかるのだが、この記事で実名を

あげられた森繁平と李（眞城）章各は、ともに峠が主宰する詩サークル「われらの詩の会」の会員であった（「われらの詩の会会員名簿」、広島市立中央図書館所蔵峠三吉資料）。われらの詩の会は、一九四九年十一月に『われらの詩』創刊号を刊行し、朝鮮戦争勃発直後の六月三十日には六号を刊行するなど、ここまで順調な活動を行っていた。森は、「アオノ・マサミ」のペンネームで五号（一九五〇年五月二日）・六号（一九五〇年六月三十日）に作品を発表している。また、われらの詩の会の中心メンバーの一人であった増岡敏和は、『われらの詩』八号（一九五〇年八月六日）に発表した作品「その炎はどこで燃えるか」で、逃亡中の李章各をうたっている。

「朝鮮問題声明書配布事件」とわれらの詩の会はこのような関わりを持っており、森ほか十五名が七月十八日に広島地裁で拘留理由開示公判をうけた際には、これを題材としてわれらの詩の会会員の林幸子が「三百十一号違ハン」という作品を作っている（『反戦詩歌集』二号、一九五〇年八月六日）。この公判には約一五〇名の傍聴者があったというが（警官と傍聴者が小競合 勅令違反公判の広島地裁）、『中国新聞』、一九五〇年七月十九日、なおこの記事では「朝鮮問題声明書配布事件」をはっきりと「反米ピラ」の配布事件であると記している）、林の作品からは、その傍聴者の多くが朝鮮人の女性や子供であり、日本人とともに地裁を取り囲んでインターナショナルを合唱したことがわかる。

以上のことを踏まえていうなら、第1連でうたわれている「拘置所の方へ」「つながれて」いった人たちは、朝鮮戦争勃発直後に米軍の介入に対してピラを撒き勅令第三一一号違反に問われ

た人たちであり、そのなかには峠の若い仲間たちも多く含まれていたことがわかるだろう。この作品の第二の部分（第11〜13連）は、朝鮮戦争勃発直後の占領下の広島のような情勢と向き合うなかでなされた表現なのである。

このような情勢と向き合うなかで、峠は、「雑音まじりのラジオが／＼どこに何百トンの爆弾を落したとか／＼原爆製造の予算が何億ドルにふやされたとか／＼増援軍が朝鮮に上陸するとか／＼とくとくとニューズをながすのがきこえ」るなかで、「青くさい鉄道草の根から／＼錆びた釘さえ／＼ひろわれ買われ」るさまを描き出す。

広島市中のあちこちに埋められたままの死者たちの遺骨がまだまだ掘り起こされていないなかで（『中国新聞』を見るかぎり、遺骨の埋葬場所が報道されはじめるのは一九五二年五月以降、すなわちサンフランシスコ講和条約の発効により占領が終わった直後からのことである）、「朝鮮特需」による屑鉄の値上がりにより人々が血眼になって「錆びた釘」を集めている朝鮮戦争下の被爆地広島の現状を、峠は痛切な思いを込めて批判したのだ。新たな戦争がはじまり三度目の原爆使用が危惧されるなかで進められている「復興」により「永久にわからなくな」ろうとしている「かろうじてのこされた一本の標柱」は、朝鮮戦争勃発直後の被爆地広島のそのようなありさまを批判的に照らし出すものとしてここでは描き込まれている。

4 一九五〇年夏の子供たち

「かろうじて残された一本の標柱」から、朝鮮戦争勃発直後の

被爆地広島の現実はこのように見据えられていたのであるが、続く第三の部分（第14〜20連）では、「一本のちいさな墓標」のもとに眠る被爆死した子供たちの「お友たち」、すなわち一九五〇年夏の広島を生きる子供たちが、「墓標」のもうひとつの主人公として描き込まれていく。

冒頭で述べたように、「墓標」は一九五〇年十月八日にはじめて朗読された後、『原爆詩集』に収録されるまでに、筆者が現物を確認しただけでも三回、新聞・雑誌に転載されており、また自筆草稿も残されている。自筆草稿も含めてその書誌を示しておく、次のようになる。（1）自筆草稿（現在峠の自筆草稿は広島大学学術リポジトリで閲覧可能である）、（2）『民族の星』四十四号（一九五一年六月六日、吉田初夫名義。峠のスクラップブックに収められた切り抜きによる）、（3）『労働新報』（全国労組統一促進会議機関紙、号数・発行日ともに不明なもの、おそらく一九五一年六月頃刊行と推測、吉田初夫名義。峠のスクラップブックに収められた切り抜きによる）、（4）『新日本文学』一九五一年八月号（峠三吉名義）。「墓標」が現在知られているかたちになるのは（4）に至ってであり、以下で述べるように、（1）と（2）、（2）と（4）の間にはそれぞれ異同がある（3）は（2）の抄録であるため、重要性が低く、ここでは立ち入らない）。

本稿で注目するのは、（1）と（2）、（2）と（4）の間の異同であるが、最も大きな変化が見られるのは、第19連である。第19連は、具体的には、次のように変化する。（なお、自筆草稿では峠による推敲が重ねられており、以下の引用は推敲後のものである）。

(1) 自筆草稿

負けるものか

まけるものか

朝鮮の友だちは

毎日炎天の広島駅で

戦争にならさぬための

署名をあつめ

負けるものか

死んだつてと

金髪の少女は

マルセーユゆきの線路に臥て

軍用列車を止める

(2) 『民族の星』掲載、一九五一年六月発表

負けるものか まけるものか

朝鮮のお友だちは

炎天のヒロシマ駅で

戦争にさせないための署名をあつめ

負けるものか まけるものか

日本の子供たちも立ち止る

(4) 『新日本文学』掲載、一九五一年八月発表

負けるものか

まけるものか

朝鮮のお友だちは

炎天の広島駅で

戦争にさせないための署名をあつめ

負けるものか

まけるものか

日本の子供たちは

靴磨きの道具をすて

ほんとうのことを書いた新聞を売る

(1) (2) (4) のどれも、朝鮮の「お友だち」が「戦争にさせないための署名をあつめ」る前半部分にはほとんど改筆がない。繰り返し述べてきたように、「墓碑」は朝鮮戦争への反戦をうたう作品であったから、ここで朝鮮の「お友だち」が現れてくることに不思議はないのだが、「戦争にさせないための署名をあつめ」とは、朝鮮戦争の勃発直前からなされていたストックホルム・アピール署名運動のことをさしている。ストックホルム・アピールは、原爆などの原子兵器の使用の「絶対禁止」を掲げて一九五〇年三月の平和擁護世界大会で採択されたものであり、世界的にこのアピールへの署名を集める運動が展開されていたが、日本におけるこの運動の担い手は、共産党や全学連をはじめとする左派組織であった。もちろんこの運動は広島でも展開されており、八丁堀交差点では占領下で公然と発表することが許されなかった被爆写真を道行く人に見せながら署名を頼んだと伝えられる（『胸痛む原爆の傷痕 広島市の平和投票』、『アカハタ』、一九五〇年五月二十七日）。

このように被爆地広島では、ストックホルム・アピール署名運

動が被爆の記憶と不可分に結びついて展開され、峠もこれにかかわっていた(『われらの詩』の誌面に、ストックホルム・アピールについての記事が多く掲載されるのは、一九五〇年春から八月にかけてのことである)。峠が「戦争にさせないための署名をあつめ」とうたつたのには、このストックホルム・アピール署名運動の経験が踏まえられていたのである。

問題は後半部分である。自筆草稿では、「金髪の少女」が「軍用列車を止める」というありきたりなレジスタンスの表現、しかも日本の現実からはかけはなれた借り物の表現にとどまっていたこの部分は、作品全体から受ける印象を変えてしまうほど劇的なかたちで改筆されることになる。(1) ↓ (2) ↓ (4) と改筆されていくにしたがって、「日本の子供たち」が「朝鮮のお友だち」と並び立つ主体性を持った存在として作品に登場してくることになるのである。

この部分の登場人物は、「金髪の少女」から「日本の子供たち」へとかわり、その「日本の子供たち」も、「朝鮮のお友だち」の署名要請にこたえて「立ち止る」ところから、「靴磨きの道具をすて／ほんとうのことを書いた新聞を売る」ところへと踏み出していく。「もうくろくろと陽に焼けて／おとなに負けぬ腕つぶしをもつた」、「生き残つたあの日の子供」たちが主体化していくさまは鮮明である。ここには、朝鮮戦争勃発直後に占領下の被爆地広島で行われた反戦運動に対する峠の姿勢が明瞭にあらわれている。朝鮮戦争への米軍の介入に反対する運動である以上、そのかなりの部分が左派の在日朝鮮人たちによって担われているなか、そこに日本人もまた主体的に加わるべきであるとする地点へと、

峠は踏み込んでいったのである。

そして、この作品は、一九五〇年夏のこのような「朝鮮のお友だち」と「日本の子供たち」の姿を経由して、もういちど被爆死した子供たちへと立ち戻り、呼びかける。第19連の立ちあがった「朝鮮のお友だち」や「日本の子供たち」の姿をうけて、峠は、第20連で、「片隅におしこめられ」「忘れられ」「永久にわからなくな」ろうとしている子供たちの霊に、「もういい だまつているのはいい」と呼びかけるのである。このようにして、朝鮮戦争勃発直後の被爆地広島での反戦運動への関わりのなかで、峠の詩作においては、被爆死し忘れ去られようとしていた子供たちが、「ひろしまの子」として甦ることになる。被爆体験をめぐる表現が厳しく規制されていた占領下、とくに抑圧の激しかった朝鮮戦争勃発直後において、それへの抵抗を通して被爆体験が捉え直されこのように表現されたということが、ここでは重要なのである。

ところで、朝鮮戦争勃発直後の広島における反戦運動と詩的表現の関係については、これまで、一九五一年九月に発表された峠「一九五〇年の八月六日」(『われらの詩』十二号、一九五一年九月二十日、『原爆詩集』所収)に即して論じられてきた。しかしながら、朝鮮戦争勃発直後の十月に朗読された「墓標」と、その約一年後に作られた「一九五〇年の八月六日」との間には、実のところかなりの温度差がある。本稿で行ったように運動史的な事実関係を踏まえながら両者の位相の違いを明らかにすることが、私の次の課題である。

謝辞 本稿をまとめるにあたっては、広島大学名誉教授松尾雅嗣先生のご配慮を賜りました。先日急逝された先生のご冥福をお祈りするとともに、深く感謝申し上げます。

資料① 「墓標」(『原爆詩集』所収のテキスト)

1 君たちはかたまつて立っている

さむい日のおしくらまんじゅうのように
だんだん小さくなって片隅におしこめられ

いまはもう

気づくひともない

一本のちいさな墓標

2 「斉美小学校戦災児童の霊」

3 焼煉瓦で根本をかこみ

三尺たらずの木切れを立て
割れた竹筒が花もなくよりかかっている

4 AB 広告社

CD スクーター会社
それにすごい看板の
広島平和都市建設株式会社
たちならんだってんぶら建築の裏が

みどりに塗った

マ杯テニスコートに通じる道の角

5 積み捨てられた瓦とセメント屑

学校の倒れた門柱が半ばうずもれ

雨が降れば泥沼となるそのあたり

もう使えそうもない市営バラック住宅から

赤ん坊のなきごえが絶えぬその角に

6 君たちは立っている

だんだん朽ちる木になって

手もなく

足もなく

なにを甘え

なにをねだることもなく

だまつて だまつて

立っている

7 いくら呼んでも

いくら泣いても

お父ちゃんもお母ちゃんも

来てはくれなかっただろう

とりすがる手をふりもぎって

よその父ちゃんは逃げていっただろう

重いおもい下敷きの

熱いあつい風の

くらいくらい 息のできぬところで

(ああいったいどんなわるいいたずらをしたというのだ)

やわらかい手が

ちいさな頸が

石や鉄や古い材木の下で血を噴き

どんなにたやすくつぶれたことか

8 比治山のかげで

眼をお饅頭のように焼かれた友だちの列が

おろおろしやがみ

走ってゆく帯剣のひびきに

へいたいさん助けて！ と呼んだときにも

君たちにこたえるものはなく

暮れてゆく水槽のそばで

つれてって！ と

西の方をゆびさしたときも

だれも手をひいてはくれなかった

9

そして見まねで水槽につきり

いちじくの葉っぱを顔にのせ

なんにもわからぬそのままに

死んでいった

きみたちよ

10 リンゴも匂わない

アメダマもしゃぶれない

とおいところへいつてしまった君たち

(ほしがりません……)

かつまでは)といわせたのは

いつたいだれだったのだ!

11 「斉美小学校戦災児童の霊」

12 だまって立っている君たちの

その不思議そうな瞳に

にいさんや父さんがしがみつかされていた野砲

が

赤錆びてころがり

クローバの窪みで

外国の兵隊と女のひとが

ねそべっているのが見えるこの道の角

向うの原っぱに

高くあたらしい塀をめぐらした拘置所の方へ

戦争をすまい、といったからだという人たちが

きょうもつながれてゆくこの道の角

13 ほんとうに なんと不思議なこと

君たちの魂のような耳に

そぎ屋根の軒から

雑音まじりのラジオが

どこに何百トンの爆弾を落したとか

原爆製造の予算が何億ドルにふやされたとか

増援軍が朝鮮に上陸するとか

とくとくとニュースをながすのがきこえ

青くさい鉄道草の根から

錆びた釘さえ

ひろわれ買われ

ああ 君たちは 片づけられ

忘れられる

かろうじてのこされた一本の標柱も

やがて土木会社の拡張工事の土砂に埋まり

その小さな手や

顎の骨を埋めた場所は

何かの下になつて

永久にわからなくなる

14 「斉美小学校戦災児童の霊」

15 花筒に花はなくとも

蝶が二羽おっかけっこをし

くろい木目に

風は海から吹き

あの日の朝のように

空はまだ 輝くあおさ

16 君たちよ出てこないか

やわらかい腕を交み

起き上がってこないか

17 お婆ちゃんは

おまつりみたいな平和祭になんかゆくものか

いまもおまえのことを待ち

おじいさまは

むくげの木陰に

こつそりお前の古靴をかくしている

18 仆れた母親の乳房にしゃぶりついて

生き残ったあの子供も

もう六つ

どろぼうをして

こじきをして

雨の道路をうろついた

君たちの友達も

もうくろぐろと陽に焼けて

おとなに負けぬ腕つぶしをもった

19 負けるものか

まけるものか

朝鮮のお友だちは

炎天の広島駅で

戦争にさせないための署名をあつめ

負けるものか

まけるものかと

日本の子供たちは

靴磨きの道具をすて

ほんとうのことを書いた新聞を売る

20

もういい。だまっているのはいい

戦争をおこそうとするおとなたちと

世界中でたたかうために

そのつぶらな瞳を輝かせ

その澄みとおる声で

ワッ！ と叫んでとび出してこい

そして その

誰の胸へも抱きつかれる腕をひろげ

たれの心へも正しい涙を呼び返す頬をおしつけ

ぼくたちはひろしまの

ひろしまの子だ と

みんなのからだへ

とびついて来い！